TwainとWarner共著『金メッキ時代』に見られる「子供」像 (1)

浅山 龍一

序

*Mark Twain's America*の中で、Bernard DeVoto はTwainのカリフォルニア時代(1866年まで) をまとめて、次のように述べている。

> In California, ...Mark's work grew surer and grew, also, broader in scope .... Washoe and California had finished what the mid-western frontier and the Mississippi had begun.... [T]he humorist, the social satirist, the pessimist, the novelist of American character, Mark Twain exhilarated, sentimental, cynical, angry, and depressed are all there. The rest is only development. (166)

すなわち、ユーモリスト (話し上手)、社会評論家、悲観論者、アメリカの国民的作家としてのTwainらしさは、すでにできており、後は自然に仕上がるのを待つだけ、というのである。

Albert Stone, Jr.は*The Innocent Eye*の中で、DeVotoが2点ほど特徴を見落としているという。ひとつはTwain初期作品の多くにおいて、主人公が「子供」であるということであり、2つ目は、Twainが子供を "innocent eye" として用いて、社会批判をさせる文学手法を用いていることである。そのinnocenceは「悪意」(malice) と「自然さ」(naturalness) を併せ持っていて、ホーソンの短編 "Little Annie's Ramble" の主人公の少女Annieが示すような、あどけない、汚れをしらないinexperienced なinnocenceではなく、自然な子供らしさ (youthful naturalness) と子供らしい正義感 (elementary moral integrity) を示すinnocenceであるという

(44-45)。ホーソンの描く「子供」について、Stoneは、a sweet, wooden figure（可愛くて、生気のない子供）であり、a sinless child（悪いことをしない子供）であり、まわりの動物や植物がお辞儀をしたくなるような子であるという。「無垢な子供が汚れた大人社会に出会い、大人たちにinnocenceの魅力を見せる。大人社会に巻き込まれそうになっても、そこから身を引く（retire）ことで悪に染まることはない」。かくして、ホーソンはsweetでunrealisticな子供のイメージ（"cherry innocence"とStoneは呼んでいる）を提供し、「アメリカ児童文学の独特の型（formula)」となったと述べている（18-19)。——筆者は、これは少し極端な言い方であると思う。たとえば、ホーソンの有名な児童文学書である*A Wonder Book*（1851）の"Chimaera"という作品（ギリシャ神話の中にある「キマイラ退治」の話を脚色したもの）にはsinlessな少年少女が出てきて、この少年とひとりの勇気ある若者が物語の進展（怪物退治）に重要な役割を果たすのであるが、同時に、狭量な大人たちといっしょになって2人をしきりに揶揄する村の悪ガキたちの様子も描かれる。また、"The Paradise of Children"という作品（同神話にある「パンドラの箱」の話を脚色したもの）においては、多くの天使のようなsinlessな子供たちの中で、自分の好奇心、ふざけ心に勝てない少女と、それを見てみぬふりをする少年（＝どちらも悪童）が大事件（「開けてはならない」とされた箱を開けてしまい、今日の人間の幸、不幸のもととなる）を引き起こすのである。ハッピーエンディングになるとはいえ、彼らの後世までの責任（？）は後味の悪いものとして残る。

さて、Stoneは、この子供ロマン主義（the Romantic image of the child）ともいえるものの哲学的土壌となったのは、アメリカにおいてはエマソンであり、イギリスにおいてはワーズワース、そして、それを発展させたのがディケンズであったと言う。エマソンとワーズワースは「子供」を神聖な者、気高くて神に近い者と讃え、ディケンズは「子供」を汚れた大人の犠牲者とする感傷主義文学（the cult of sensibility）を生んだ。この子供ロマン主義がアメリカ東部において、ホーソン、アボット、オルドリッチ、L. M. オルコット、ストウ夫人に、さらには、同じ東部のNook Farmという高級住宅地に住む文人たち—— C. D. Warnerや姪のLily Warner、そして移り住んだストウ夫人——に引き継がれていたというわけである。こういった

"genteel" (2) な児童文学の花が咲き誇るNook FarmにTwainが妻子とともに引っ越してくる (1871年)。1874年に、豪勢なTwain邸ができあがると、日常的に出入りしていた隣家のWarner夫妻やストウ夫人以外に、オルコット (父)、ハウェルズ、オルドリッチ、ハート、M. アーノルドといった大物文人たちが次々訪れることになる。そしてこの後、約20年間にわたり、Twainがこの文人サークルの中心となる (13-14)。Twain邸での朗読会では、ディケンズ、クーパー、L. M. オルコットが朗読されたという (4)。Stoneのこの分析・紹介は筆者にとって重要である。後に述べる、Twainとストウ、そしてホーソンの描写の似通いの説明の助けとなるからである。

そして、隣人同士であるTwainとWarnerが1873年に合作で『金メッキ時代』を発表するが、それまでに2人がそれぞれに描いていた「子供」像が、同作品に色濃く反映されることになる。

<その1> Twainの描いていた「子供」像

Twainのような非genteelな作家 (実際、彼のいくつかのスケッチは東部の代表的なgenteel文芸誌 *Atlantic Monthly* にはすでに掲載拒否をされている[1]) がこのNook Farm社会に受け容れられたのはどうしてであろうか。アメリカの産業革命が進み、彼のヨーロッパからの紀行記事 (1867年に新聞連載) とそれを改訂し出版した本*The Innocents Abroad*(1869年) が大成功で、一躍、豊かな「有名人」(Andrews, 16) になったからであろうか、それとも、程度はひどくない (比較的genteelな) ものの、いたずらをした子供時代を懐かしむような文学作品 (オルドリッチの*The Story of a Bad Boy*。以下、『悪童物語』) が東部に出現した (同じく、1869年) ——その意味では、序で述べた、大文豪ホーソンが登場させた「悪童」と同じく、たぶん、genteelな読者の心をくすぐり、思わずほくそえませた——からであろうか。

ともかく、Twainの描く「子供」たちは、徹底して、genteelな生き方を茶化す子供たち (自分が、センチでgenteelな生き方をしてみて、恥をかく場合も含む) である。『金メッキ時代』が出るまでに、大きく分けて3つのタイプが見つかる。別の拙論[2]において、これらのタイプについては分析・紹介したが、その際、話題にしなかったTwain作品を含めながら、再度確認しておきたい。

まず、3つのタイプとは、①ハックタイプ——後のハックに代表されるような、物事を冷静に観察し、批判するものの、同時にそこから学ぼうとするタイプ、②前期トムタイプ——後の『トム・ソーヤーの冒険』(1876年) に見られるトムのような、即興の嘘、幻想、陰口、いたずらで大人社会に対抗し、かき回すタイプ(悪意はない)、③後期トムタイプ——『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885年) に見られるトムのような、自己中心的で、他人を犠牲にしてもヒロイズムを楽しむタイプ、である。これらのタイプはTwainの初期の作品にすでに頻繁に描かれており、たとえば③のタイプが『ハック・フィン』以降に初めて登場するという意味ではない。

①タイプは1852年 (Twainは16歳。兄が出している新聞に投稿) の作品にすでに見られる。「歴史的見世物——一流のトリック (Historical Exhibition—A No.1 Ruse)」(*Early Tales, I*, 79-82) というタイトルのついたこの作品は、ある見世物サギを糾弾するスケッチである[3)]。

——あるビジネス企画会社が町でショーをやった。題して『ボナパルテ、ライン川を渡る (Bonaparte Crossing the Rhine)』。入場料は大人10セント、子供5セント。少年ジムと仲間たちがやってくる。手に手に5セント (彼らにとっては大金?) を握りしめて。そして生きるか死ぬかの問題であるかのように、真剣なようすでお金を支払って入場する。「おじさん、見せておくれ、すごいやつ」。ジムはもう居ても立ってもいられない。他の子供たちも、かたずをのんでじっと見入っている。前にいる弁士のどんな小さな動きも見逃すまいと。——子供のinnocentな、一生懸命の様子が上手く描かれている。

ショーが始まった。男は引き出しから3インチほどの骨を取り出して、おもむろに解説する。「皆さん、今ご覧になっていますのが——」

「うん、うん」と目も耳もそして口も大きく開けたジムが答える。

「ボナパルテ (Bonaparte)、つまり、Bony-part、あのう、豚の足の“骨の部分 (bony part)”であります」。集まった観衆は大喜び。歓声が響きわたる。

しかし、ジムは笑わない。彼はまじめな顔で、何がおかしいのか、といったようす。男が同じ説明を、判決を下す裁判官のように繰り返すと、「そ、そ、それだけです、か (Is-is a-a-that all)!」と、ジムは、青い顔をして尋ねる。

「いやいや、これはほんの1部です」と、男は1ドル札ぐらいの大きさの皮を取り出す。「皆さん、ここに取り出しましたのはRhine（ライン）です」。真面目な顔で続けて、「もっと適切に申し上げれば、豚の“皮（rind［＝raind］）”です」。笑いが起こり、静まるのをまって、「さて、ようくご覧になってくださいよ。ここが、本日のショーの一番の出し物ですから」と言いながら、おもむろに、ゆっくりと例の骨を皮の上で行き来させる。そして、「皆さん、The bony part crossing the rindであります。Napoleon〔＝ Bonaparte〕crossing the Rhineであります！」と叫ぶ。

ジムは怒りが込み上げてくる。「お、お前は、サギじゃないか！」会場は大笑い。さらに、「ここはサギの店で、これはサギのショーで、人をだましているだけじゃないか！」会場は笑いにどよめく。…そのうち、ジムも苦笑いを浮かべる。そして、その後、彼は意気消沈した姿で会場を去っていく…。「畜生、きたねえやつ（Sold!—cheap—as—dirt）」とののしりながら。——ハックのような観察眼をもち、innocentで正義感のある少年（①タイプ）と、それをもてあそび、嘲笑する大人たちの世界が対照的に描かれている。

また、1867年に出版された *The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County, and Other Sketches*（以下、『跳び蛙』）の中に、手紙の下手な人たち用に「模範的な手紙の書き方」として載せた、彼の8歳の姪からの手紙がある。「Markおじさんへ」で始まり、「なき虫（Sissy）McElroyのお母さんがまた赤んぼうをうんだんだよ」と言ったあと、次のように続く[4]。

> She has them all the time. It has got little blue eyes, like Mr. Swimley that boards there, and looks just like him. I have got a new doll, but Johny Anderson pulled one of its legs out. Miss Doosenberry was here to-day; I give her your picture, but she said she didn't want it. (32)

子供らしい動詞の活用間違いは別にしても、（書いた本人は気づいていないが、）他人の家庭の大問題をはらんだ話、話題の思わぬ展開、等に読者ははらはらする。しかし、こういうのが、面白い、要をついた「模範的な手紙」というわけである。少女はsincereで、ハックの雰囲気が出ている（①タイプ）。

同じく67年のヨーロッパ紀行記事（西部の大新聞*Alta California*に連載）の中に、

貧しい、シリアの村の話がある。

> When you ride through one of these villages at noonday, you first meet a melancholy dog, that looks up at you and silently begs that you won't run over him, but he does not offer to get out of the way; next you meet a young boy without any clothes on, and he holds out his hand and says "Bucksheesh!"—he don't really expect a cent, but then he learned to say that before he learned to say mother, and now he cannot break himself of it; .... (McKeithan, 188-9)

犬も子供も①タイプである。lazyで、credulousで、innocentに描かれている。

さて、のびのびした、いたずらっ子を描く②タイプはTwainの真骨頂である。L. M. オルコットの『若草物語』(1868年) やオルドリッチの『悪童物語』(1869年) ——活発な少年少女が登場しているとはいえ、どちらも、まだgenteelな香りが残っている——より以前に次のようなスケッチを発表している。

まずは1864年に発表された「クラップ女史の学校 (Miss Clapp's School)」(*Early Tales, I,* 334-338) という作品[5)]。

「先日、市の教育委員会の誘いで、クラップ先生の学校参観に行ってきた。——"つづり方" の授業があったが、…ちゃんと教えられた子は無数の難しい語を、なんのためらいもなく、すらすら書ける。そして、これほど簡単な単語はないといえるような語でつまずく。よくあることである。"読み方" の授業では、昔と同じように、詩を抑揚をつけて上手に読む。…聴いていて、気持ちがよい。最近は、教室で歌も唄う。昔と比べてよくなった点である。また、最近は、授業中、ハエをつかまえたり、先生に紙つぶてを投げつけたりしない。これも、昔と比べてよくなった点である。それに、男の子と女の子が互いを監視し合って、悪いところを見つけては職員室に報告するというのもなくなった」。この学校のよい点をあげながら (別にたいしてよくもないようだが?)、反面教師的に「子供」の "本来の姿" (ここでは、②タイプ) を示している。本来、じっとしていないいたずら小僧たち——。12年後に登場する「トム・ソーヤー」とその仲間たちそのままである。そしてまた、この「授業中、ハエをつかまえたり…」というスケッチは『トム・ソーヤー』の「教室描写」そっくりである。

同年に出た「すばらしい学校 (An Excellent School)」(*Early Tales, I,* 334-350)

というのを見てみよう。「ローラー氏の学校は、州一番のすばらしい私立学校である」と始まる。「1週間前に行ってみたが、この学校に6ヶ月もいたら、子供は大学並みの教育が受けられると思った。…先生の学校は教室全体が黒板のようになっており、難解な数学の定義があちこちに書いてある。先生はありとあらゆる科目の授業をして、生徒たちはその要約をどんどん黒板に書いていく。この子たちは1日に30分こういうことをするだけで、4、5ヶ月で、ふつう18ヶ月かかることを覚えてしまう。先生はこのやり方で、スプーン1杯分ぐらいしか脳みそのない子にでも（いやみなユーモア？）、ありとあらゆることを教え込んでしまうだろう。これは決して大袈裟に言っているのではない。」そして、少し話がそれ（＝Twainらしいところ）、その後に「先生のところには“つづり方”の教科書を丸暗記した子もいて、こちらが章の番号を言えば、そこに出る最初の単語を答え、その章の35個の単語を全部書いてしまう。ある単語を言えば、何章に出ていて、その前後の単語が何だったかも答える。… 難解な文法の質問をすれば、クラスの全員が声を合わせて答えてくれる。何が正しく、何が間違っていて、それはなぜか。『規則』と『例文』を引きながら、こちらが、ああ、聞くんじゃなかったと後悔するまで解説してくれる」と続く。『トム・ソーヤー』の中の、聖書の文句をどんどん暗唱してしまって、ついに頭がおかしくなった優秀少年のエピソードを思わせる。「数学の計算などさせるともう大変。1本のチョークで黒板上に奇跡を演じてくれる。…この子たちにあなたの誕生日を教えたりしたら、彼らはあなたのお婆さんの年齢まで瞬時に答えてしまうであろう」。——トールテール風にまとまっているが、(②タイプの)子供の利発さとその可能性を讃え上げている。

さて、③タイプであるが、たとえば、「アドバイスもの」[6]がある。ひとつは、1865年7月1日、青少年向け文芸誌 *Youth's Companion* に発表された、“Advice for Good Little Boys”（*Early Tales, II*, 242）である。

「他人のものを盗ってはいけません——運べないものは。

もし、うっかり（unthinkingly）誰かの椅子にビョウをしかけたときは、その子がそこに座っても笑ってはいけません——笑いをこらえきれなくなるまでは。

よい子はうそはつきません。本当のことでも間に合うときは。——ぜったい必要なとき以外は、うそはつかないものです。

…悪いことをして、それを弟のせいにしてはいけません——他の子でも間に合うときは。

年老いたおじいさんを『へんな老いぼれ (rum old file)』などとよんではいけません——どうしてもこらえきれないとき以外は」という調子である。

また、同年7月8日に（同文芸誌に）、今度は女の子向けに "Advice for Good Little Girls"（*Early Tales, II*, 244-245）が発表されている。

「よい子は先生に、べえ (make mouths) などしてはいけません——小さなことでは。とくに頭にきたときだけにします。

…よい子はお年寄りを尊敬します。お年寄りにうるさくして (sass) はいけません——向こうがうるさくしない限りは」等々と続く。

どちらの作品も、短いのだが、子供（そして人間？）が隠し持つ、他者の迷惑を顧みない、自己中心的世界（③タイプ）を見事に浮き彫りにしており、思わず、読者の自嘲的笑いを誘う。

1865年12月には、"The Christmas Fireside for Good Little Boys and Girls"（*Early Tales, II*, 407-410）という作品が発表される。「楽しい人生を送った悪い少年の物語 (The Story of the Bad Little Boy That Bore a Charmed Life)」と副題がついている（以下、「悪い子物語」）[7]。話は、日曜学校の教科書の物語のパロディになっていて——少年ジムには、（よく、日曜学校の本に出るような）信仰心があってやさしい、病気がちの母なんかいません。この母親は、いうことをきかなければ「首をへしおってやる」といいます。ある時、ジムは貯蔵庫からジャムを盗み出して食べ、「こりゃ、うめえ (it is bully)」と言い、代わりにタールを入れて「こりゃまた、うめえ (that is bully also)」。罪の意識なんかありません。お母さんに自分のしたことを言って許してもらうなんて考えません。見つかると、知らないとウソをつきます。… 木に登って、りんごを盗んでも、木は折れません。日曜学校をさぼって、ボートに乗っても転覆しないし、釣りに行っても嵐は来ないし、雷にもうたれません。… ジムは大きくなって結婚し、大家族を作って、… ある夜、オノで家族全員の首をはね、村の大悪人になって皆に尊敬され、今では州会議員になり、愉快な人生を送っています——といったものである。先に述べた、東部の一流文芸誌*Atlantic*が掲載を拒否した作品であ

る。Twain本人は気に入ったようで、1867年の『跳び蛙』に再録する他、調子に乗って、後に（1870年）、*Galaxy*（当時、米国で1、2を争った文芸雑誌）に、「幸せにならなかったよい少年の物語（The Story of the Good Little Boy Who Did Not Prosper）」というタイトルで、今度は、日曜学校の本と聖書に書かれた通りの生き方をするジェイコブ少年の物語を書く（以下、「よい子物語」）。彼は、やってはいけないことをやる悪い子をたしなめて善導しようとするのだが、ことごとくうまくいかず——たとえば、「りんごを盗る子は木が折れて腕を折るよ」と注意してやると、確かに木は折れるのだが、相手はジェイコブの上に落ちてくる、そしてジェイコブの腕を折るだけで、向こうは何ともない——、あげくは悪童たちにしかけられた爆弾で「見事に爆死」（You never saw a boy scattered so）するという、悲劇物話（？）である。前者は悪い子のヒロイズム、後者はよい子のヒロイズムが描かれ、どちらにおいても、悪い子が成功し、幸福になるというブラック・ユーモア世界（読者は自嘲的に笑ってしまう）を紹介している。

その間、1868年7月に書かれたが、未発表に終わった「少女宣教師メイミー・グラントの物語（The Story of Mamie Grant, the Child-Missionary）」という作品もある（*Notebooks, Vol.1*, 499-506）。

「メイミーは普通の子とは違って、きちんと教会に出席し、それを難行苦行（an irksome penance）とはとらず、喜びであり、特権と考えていました」と始まる（「普通の子とは違い」ということで早速、作者のイヤミが入っている）。「いつも一番に日曜学校に入り、最後まで残っていました。日曜学校の図書室は、彼女にとって学びの宝庫でした。彼女はそこの本に散りばめられた知恵を上手に引き出すことができるので、まわりの子が目をみはり、年寄りが褒め讃えるのでした」。「トム・ソーヤー」がかき乱したくなるような雰囲気が漂っている。「彼女自身、これらの本の中のヒロインのようになって、迷える人々（the lost）を救いたいと思っていました」。よい子のヒロイズム願望が伺える。

さて、9歳のメイミーは、おばさんの家に1週間ほど遊びにきている。朝食のとき、「バターケーキはいかが？」と信心のない（unregenerated）おばさんに尋ねられ、「いいえ、おばさま。おばさまの魂が救われるかどうかというときに、バターケーキな

んていりませんわ」と答える。先に述べた「よい子物語」(1870年) のリハーサルの感がある。おばさんは気分を害し、「何いってんのさ！(Oh, stuff!)」しかし、思わず、自分を抑えて (？)、「…お食べなさいよ。ミルクもここにありますよ」と。口の悪いのは、「悪い子物語」の母親のイメージである。メイミーは食べるのをやめて、「おばさま、パンとミルクは罪深いこの世の虚栄の表われ (a vanity of this sinful world) なのよ。まずは、正しきミルク (the milk of righteousness) を求めなければいけないのよ。パンやミルクはそれに続くものなの」と話す。どうやら、この子は教会の説教をよく暗記しているようである。おばさんは唖然としている。

ドアのベルが鳴り、出るようにいわれたメイミーは物思いに沈みながら (pensively) (9歳ですでに人生を憂いている？) 応対に。国勢調査の人であった。辺りのすべての住民の名前を集め、帳簿に記載するのだという。メイミー「魂を集めるなんて、すばらしいお仕事ですわ」客「何だって？ わしは所長の言うことをやっているだけだ。ご主人を呼んでください」メイミー「人間よ (Mortal)、虚栄を捨てるのです。むしろ、この世のどんな豊かな者よりも恵み深い神様の仕事をするのです。ここにあるパンフレット (tracts) をお持ちなさい。そして、皆に配るのです。昼も夜も、迷える者のために配るのです。…そうやって、罪びとのためには光り輝くランプとなり、日曜学校の本の中に不滅の名 (deathless fame) を残すことができるのです」。そして、メイミーはパンフレットの解説を始める。いつしか、客はいなくなる。

再び、ドアのベルが鳴る。新聞の勧誘である。客「モーニング・ガゼット！2週間で40セントです…。町で一番売れてます」メイミー「まあ、バプティストの新聞かしら？」客「いえ、民主党の——」。手元のパンフレットを紹介しながら、宗教を扱う新聞に変えるように説得を始めるエイミー。いつしか、客はいなくなる。

また、ドアのベル。客「お早うございます。ご主人は？先月お借りした1000ドルを返しに来ました」メイミー「また、この世のつまらぬこと (paltry concerns) に、煩わされているのね。…はかないこの世の宝を思うのではなく、虫もつかず、泥棒も盗めない天国に宝を積むのです」。メイミーの説教が始まる。いろいろなパンフレットを見せながら。客「でも、お嬢さん、わしは急いでいるんです…」メイミー「あなたは急がなきゃだめよ。次の世に向かって急ぐのよ。…ここにも書いてあるように、

金銭欲は魂を焼き焦がし、神様から永遠に離れてしまうのよ…」客「お嬢さん、でもわしは――」メイミー「来たるべき神様の怒りから逃げるのです。まだ間に合ううちに、逃げるのです…」。客はいなくなる。

ドアのベル。客「お嬢さん、ご主人に、今すぐ1000ドル返すように言っていただけますか。さもないと、抵当にした物を取り押さえますよって」。メイミーは悲しそうな表情でじっと相手を見て、心をこめて言う。「あなたは、改心をしたことがありますか？」客「何だって！」メイミー「あなたは、今、火山の上にいるのです。今死ぬかもしれないのです。…この世のことは忘れて、よい行いをしましょう。財産は貧しき者に与え、布教の旅に出るのです。まだ間に合います。このパンフレットを読んでください」と解説を始める。そこには、酒に酔って家族を皆殺しにした男のことが描かれている。…男は悔い改めて、再婚し、信心深い家庭を作る。…また、酒に酔い、瓶を家族の頭に打ちつけて殺す…。しかし、ある罪深い人の話を聴いて悔い改める。再び、賢い子供たちのいる家庭を作り、…ある日、またしても酔って、子供たちを殴り殺し、妻を3階の窓から投げ飛ばす。気がついたら、家も友も失ったひとりぼっち…。メイミー「この話を戒めにするのです。この人が耐えて、その後どうなったかご存知ですか。ついに完全に改心した彼は、今では全国を回って、禁酒運動の講演会をし、日曜学校の組織をまとめているのです。あなたも、今なら…」。客がいなくなる。

夕方、メイミーがパンフレットを配って帰宅すると、おじが打ちしおれている。「ああ、もうだめだ。…貸した金は戻ってこないし、家も抵当にとられて、なくなっちまった！」メイミー「心配ないわよ。…この世のことで煩うのでなく、次の世で起きるすばらしいことを考えましょう」。おじは、ひとりうめいている。「彼には信心がないのだ」と作者のコメント（イヤミ？）。「今日は本当にいいことをしたわ。きっと日曜学校の本に私の名前が載るわね…。うれしいわ！」と寝床で思うエイミーであった――と終わる。主人公（エイミー）がヒロイズムに酔い、自己満足している。本人に悪意はないが、陰で迷惑を被る犠牲者が何人もいる。とくに、この「おじ」はその後どうなるのか!? ――無責任な③タイプの子供が見事に描かれている。終わりのほうの「殺人鬼」の話（「悪い子物語」に描いたものをさらに悪質にした？）も、きわめてひ

どい、無責任な展開（ブラック・ユーモア）で、この物語にぴったりである。

＜その2＞Warnerの描いていた「子供」像

Warnerは何といっても、Nook Farmに伝わったgenteelな伝統を受け継ぐ作家である。彼が、東部の知的拠点のひとつであったHartfordの有力新聞の編集長でありながら、政治世界に嫌気がさし、軽いタッチのエッセー（“charming and amusing personal essays”〔LeMaster, 772〕）に興味をもったこと、その発表した初期作品が、話題といい、ユーモラスな話の進め方（虚勢をはった者たちを茶化す茶化し方）といい、「子供」の描き方（やはり3種類が見つかる）といい、Twainにそっくりで、影響を受けたことはまず間違いないということについては、別の拙論[8]で述べた。しかし、それでも、センチメンタルで、genteelな雰囲気があちこちに強く感じられるのである。*Saunterings*（1872年）の中の、「子供」を扱った場面をいくつか見てみよう。

イタリアのナポリ湾に面したソレントという町の裏にある高原を旅したときのスケッチである。「私はユリシーズと妖精セレーンたち（the Serenes）の物語は、仕事や生活闘争から目を背け、快楽に魅せられた人間のことを描いた、詩人たちの作り話だと思っていた。…しかし、ある女性が、ソレントの裏山を登り、セレーン島を臨む者はここの海岸から離れる気力をなくしてしまう（whoever climbs the hills behind Sorento, and looks upon the Isle of the Sirens, is struck with an inability to form a desire to depart from these coasts)、と言うのを聞き、〔実際来てみて、〕2度とここに来れないかもしれないと考えると、私もやはり悲しくなるのだ」(241-2) と始まる（英語も東部の文人らしく、洗練されている。ホーソン風のgenteelな世界を描くのに適した言葉使い？）。ひとしきり、辺りの自然の美しさ、町の歴史や“いわれ”を紹介した後、「山を下に降りていくと、辺りは美しい花々でいっぱいになる」と、次のように続ける。“—scented violets, daisies, dandelions, and crocuses, large and of the richest variety, with orange pistils, and stamens purple and violet, the back of every alternate leaf exquisitely pencilled.”ほとんど、ロマン派詩人の筆致である。そして、ホーソンもこの筆致であった。「寺院や、ぶどう畑で働く日焼けした逞しい

男たちと感じのよい女たちのそばを降りていくと、…とても美しい峡谷——美しいスイスの峡谷をさらに美しくしたような——に出る…。平和の霊そのもの（the very spirit of peace）がここにいて、小道に響きわたるやさしい鐘の音が何の妨げにもならない」と読者を楽園に誘い込む。「山の家々とオリーブ畑のそばを歩いていると、5、6人の子供たちが私たちを見にやってくる。そして、わっとおびえたように家のほうに走ってもどる。つまずいて、互いの上に重なるようにしながら、叫び声を上げる。一番年長の女の子は、赤ん坊を抱きしめて、走り去る。私の仲間が帽子をふって“Hullo, baby!”と声をかけた。そして、私たちが門の前を通り、壁の下あたりに来たとき、ぼろを着た、日焼けしたこの子供たちの部隊（troop）が段々畑から飛び出して、走りながら後ろから、“Hullo, baby!”“Hullo, baby!”と見事な英語で、私たちが見えなくなるまで叫ぶのだ。次にここにやってくる旅人は、この賢い（quick-witted）子供たちに、同じように声をかけられるだろう。そして、その旅人が言語学の才をもつ者なら、たぶん、あれこれ考えて、この子供たちの使う言葉のルーツをギリシア語まで遡ることだろう」(246-7)。①タイプの「子供」たちの学習能力を讃えると同時に、無垢で陽気な彼らの様子が伝わってくる。汚れのない、genteelな雰囲気が漂っている。この子たちは、ホーソンのAnnieの延長上にいると言えまいか。

少し先を読んでみよう。同じナポリ湾でもCapri島が見える辺りは、畑もオリーブの木もない。土地が荒れ、ごつごつした岩肌が見える。短いフサのような草とヒラマメのような植物以外、野菜は育たない。石灰岩層が顔を見せている。そして、Warnerは次のように言う。「岬の崖沿いに、海に向かって降りていくと、あちこちの岩の上にウサギのように百姓たちが散らばって、やせ細った牛の世話をし、岩の隙間の草を抜いている。女も子供もボロを着て、態度も荒っぽい。私たちがそばを通ると、大声で物乞いをする。醜い女たちが、かわいそうな子供たちをたたく。——私たちの同情をひき、金を出させるためなのだ」(265-6)。子供は大人の犠牲であり、金儲けの道具にされている。貧しさのためとはいえ、pathosを感じさせ、ディケンズの『オリヴァー・ツウィスト』(1837年）を思い起こさせる。罪のない子供はgenteelに描かれている。

「子供」と同じように無垢で素朴なものとして「動物」、とくに「家畜」が考えられる。

Warnerはロバについて「どんなに邪険に扱われても我慢し、主人に仕えるりっぱな動物である。よく、頑固だといわれるが、それはロバからすれば、自分の判断でよく考えて行動しているだけなのだ」等々、褒め上げておいて、次のように言う。「ロバより頑固な人間はたくさんいる。しかし、かわいそうに、この動物は殴られたり、たたかれてばかりいる」(263)。①タイプとして褒めておきながら、人間の犠牲者として、pathosを込め、genteelに描いている。同じく「動物」を描いても、Twainの動物たちは、——自分でものを考え（これは、Warnerのロバも同じ？）、主人を無視して、自分の好みで行動する。自尊心をもっていて、殴ろうとすると、じっと沈黙する。“復讐”を恐れて、こちらは手が出せなくなる…（読者は思わず、笑ってしまう）といったパターンになったりする。その他、怠慢な犬、クギでも皿でも、主人の服でもうっとりとした表情で食べてしまう——自分で痛い目に遭うまでやめない——ラクダが描かれる。①タイプ、または②タイプの動物たちなのである。Genteelではない。

Warnerは、Twainの影響で、②や③タイプの「子供」も描くが、それらについては、別の論文[9]で論じたので、本論文では省略する。

さて、何といっても、次のような物語を紹介するとき、彼の真骨頂が現れているように思われる。Capri島の話である。

ある若い男女が恋をした。男は木の細工師。政変があり、彼にも3年間の徴兵が課せられた。しかし、男は、3年間も愛する恋人から離れていたら、彼女の身に何が起こるかわからない。自分より魅力ある男が現れたら…、と思う。彼は、多くの若者がしたように、徴兵を逃れるために、島から脱出して、山に入る。少女は男の身を案じながら、結婚のためのベッドカバーを編む日々。月日が経ち、カバーは王室のベッドを包めるほどの大きさになる。一方、男は、生きるために、仲間とともに山賊になり、盗みを働いていた。少女にとっては不安の数ヶ月。沈んだ心と不安に満ちた指先でひたすらカバーを編む。だが、楽しかったときに編んだ柄と、ひとりになってから編んだ柄は違う。…男も本当の山賊になり果てたくはなかった。できたら、そっと戻って来たかった。外国に逃亡し、そこで娘と待ち合わせてもよかった。もし、政府が許してくれるなら、戻って、3年でも30年でも兵役に服してもよかっ

た。少女も男を信じて待ってくれるであろう…。ところが、ある日、政府が山賊を一掃すべく、突然、総攻撃をかけた！彼は頭を銃で撃ち抜かれる。新聞にその名が出たときの少女の悲しみ…。「それは、ここに私が書く以上のものがあったはずである。彼女にとっては、銃で心臓を撃ち抜かれた以上の辛さであったろう」(と、Warner)。彼女はわずかな希望も失い、町を放浪するようになる。「私が聞いた話では、彼女は一見、相変わらずさびしく、相変わらず美しい。しかし、彼女の顔には深い影が宿ったという」。村人は彼女を見て、ただ黙するだけで、何もしてあげられなかった。最後に、「今日、聖者に近づいた顔をしたこの娘が、教会で跪いてお祈りをしているところを、私は見た」と結ぶ (273-279)。——Genteelな、心の美しい乙女の恋の哀しみがセンチメンタルに謳いあげられている。ディケンズの『ディヴィッド・コパフィールド』(1849年) 中の一場面 (だまされていると知らず、恋人をひたすら想う娘) を思い起こす。Warnerは「子供」というより、「思春期の若者」の心を描くのに長けているようである。

<その3>『金メッキ時代』に描かれる「子供」像

TwainとWarnerが意気投合して、数ヶ月で書き上げた『金メッキ時代』(1873年2月～4月) において、「子供」が登場するのは、Twain担当の章だけ (とくに、第1～11章と第53章) である。「子供」に関する限り、以上見てきた通り (別の拙論も含め)、WarnerはTwainから影響を受けた側であるので、彼は、この2人の自叙伝的物語において、「子供時代」を担当するのは遠慮したのかもしれない。しかし、どの章も「両名が目を通していないところはない」(前書き) わけで、Twain担当の章とはいえ、Warnerからの意見、影響は感じとれるのである。テキストには *The Gilded Age—A Tale of Today* (A Meridian Book) を用いながら、読み進めたい[10]。

まず、テネシー州の山間地にある、貧しいホーキンズ家が紹介される。「ホーキンズの家は2棟建ての丸太小屋で、朽ち果てていた。やせた猟犬が2、3匹、敷居の辺りに寝そべり、夫人や子供たちが出たり入ったりしながら、猟犬をまたぐときはいつも、頭を上げて悲しそうな顔をした」(23)。これは、すでに紹介した、Twainの「ヨーロッパ紀行記事」のシリアの——産業革命に取り残されたような——貧しい村の描

写とそっくりである。犬がlazyでseriousに描かれており、①タイプである。この辺りの子供たちであるが、他の男たち同様、「皆、ポケットに手を突っ込み、…自分の敷地でとれた自然のままの葉タバコをかんでいるか、とうもろこしの軸で作ったパイプで葉タバコを吹かしている」(25)。世の中をじっと観察している、後のハック・フィンのイメージの少年たちである。やはり、lazyでseriousな①タイプの「子供」たちである。「台所には妻がいて、干しりんごのパイを作っていた。汚い身なりの10歳の男の子は、自分で作った粗末な風見鶏のことをあれこれ考えていた。そろそろ4歳になる妹のほうは、とうもろこしパンをフライパンの底に残っている肉汁に浸していたが、フライパンの中身を指で2等分する線を入れ、一生懸命にその線をこえて浸さないよう気をつけていた。半分は兄さんの分だったから。兄のほうは風見鶏のことで夢中で、空腹であることを忘れていた」(26)。兄にしても妹にしても、それぞれ自分のことで一生懸命の健気な子供たちであり、やはり、①タイプに描かれている。

両親（とくに父親）は、ここの土地を手離さなければ、いずれ、蒸気船が上ってくるようになり、鉄道も敷かれて、土地の価値が暴騰し、大金持ちになれると信じているものの、余りに貧しい生活が続くので、夢想家・投機家の友人セラーズ大佐の手紙（「ミズーリにすぐ来いよ！…後悔は絶対させない。…壮大な計画があるんだ」(30)）に乗せられ、土地はそのままにして、家族でミズーリに移動することに決める。セラーズは、悪気はないものの、今までに何度もいい話を持ち出し、その度に運に見放され、ホーキンズ一家を窮地に追い込んできた人物である。ほら吹きのセラーズも、それにすぐ乗せられるホーキンズも、「子供」っぽい夢想家で、②タイプに描かれている。Twainはすでに「すばらしい学校」というスケッチでトールテールの世界（「あなたの誕生日を教えたら、あなたのお婆さんの年齢まで即座に計算してしまう子供たち」の話等々）を紹介している。話を聴いている分には、ほうっと言いたくなるほど面白いのだが、乗せられた者は結局、バカを見るのだ。また、この2人（セラーズとホーキンズ）は、トム・ソーヤーに“運”がなくて大きくなったような連中で、このまま行けば、将来のさらなる失敗が予想できる。

一家は旅の途中、ある小屋の入り口で、涙でぐしょぐしょの少年を見つける。母

親が死んだばかりなのである。ひとりの老女が、熱病で死んだばかりのこの母親のことを話しする。…父親と他の子供2人は先に死んだ。母親はがっくりきて、残った息子クレイのことしか考えていなかった。子を可愛がり、子も親を大事にした。母親は3週間患った。子は一生懸命働き、薬を買って、寝ずに看病をした。でも、容態がどんどん悪くなり、とうとうわが子がわからなくなった…。子は頬ずりをして呼ぶが答えがない。「(それを見たら)まわりの者は、心臓が破裂しそうだったよ」。しかし、そのうち、母親もわが子に気づいて、大声を上げて抱きしめて何度もキスをした。でも、それが最期だった…。——棺に納められた母にもたれて、声も出さずにむせび泣くクレイ。小さな手をのばして髪に触れ、顔をやさしくなでる…。感じやすいホーキンズとやさしい妻は、この子を引き取ることにする(33-34)。——ディケンズが描く、貧しい、または社会の犠牲になった汚れのない(=genteelな)親子、あるいは夫婦の愛情の形にそっくりである(Blairが『トム・ソーヤー』と『ハック・フィン』について、『二都物語』からの影響を述べている(64-66)が、この箇所のsentimentalでsensationalな描き方はまさにディケンズ風である)。また、(ディケンズの影響を受けたと思われる)ストウ夫人の筆致にも近い。ストウは『アンクル・トムの小屋』(1853年)の中で、競売にかけられた黒人の母と子が離れるまいと必死に抵抗し嘆願する場面その他を感動的に描いている。すでに見てきたように、Warnerもセンチメンタルでgenteelな世界を描くが、ここまでsensationalには描けない。だが、Warnerは早くからストウの描き方を尊敬していた("Warner's early deference to the sentimentalism of Mrs. Stowe"〔Andrews, 184〕)ので、共著者として、Twainのこの描写には強く賛同したのではなかろうか。ただ、この後、クレイは1、2回登場するものの、物語の中心から姿を消す。Twainはこの時期、genteelでセンチメンタルなものを嫌っており(「よい子物語」でも「よい子」は茶化され、ひどい目に遭ったし、「アドバイス」において、子供たちがなるべき「よい子」とは「頭のよい、ずる賢い子」であった)、描写し続けることが嫌になったのではないか。ずっと後に、『アーサー王宮廷のヤンキー』(1889年)や『うすのろウィルソン』(1894年)において、母と子の(作者Twainが茶化すこともできない)激しいセンチメンタリズムが描かれることになるのだが。

1週間後、初めて見たミシシッピーに、子供たちは肝を潰す。「たそがれの中、1マイルにわたる水の広がりは大海に見え、はるか向こう岸にのびる輪郭のぼやけた一筋の木立は大陸の端に見えた。…ふくろうのホーホーという声が、犬の遠吠えか、遠くの落ちくぼんだ岸に打ち寄せる波の低い音か、…ときおり響くその音で、静寂はさらに深まった」(36-37) という観察描写は、「歴史的見世物」スケッチのseriousでcriticalな少年の視点 (①タイプ) で描かれており、後のハックを思わせる。大自然に畏怖しながらも、すべてを学ぼうとする姿勢が出ている。「子供たち (Twainは、黒人奴隷2人と子供たちをこう呼んでいる。「どちらも、物事に単純で、広い視野に欠けているから」とのこと) は、眼前に広がる風景の雄大さと荘厳さに感動し、辺りには目に見えない精霊たち(invisible spirits)がひしめいているようで怖かった…。声もだんだん小さくなり、神妙になってきた」(37)。ますます、ハックの感覚に近づいている (①タイプ)。——不意に黒人のダヌル爺や (Uncle Dan'l) が「子供たち、何かが来るだよ (Chil'en, dah's sumfin a comin) !」と言う (黒人なまりでリアルに描かれている。後の『ハック・フィン』における、黒人ジムの登場を予見させる)。低いせきこむような音が、1マイル彼方の流れの中に浮き出た木々の生い茂る岬の方から…。見る間に燃え上がる炎のような片目が飛び出すと、水面にゆらゆらとゆれる一条の長く明るい光。せきこむような音はさらに大きくなり、ギラギラ光る目もさらに大きくなって狂ったように輝く。巨大な何者かが暗闇から姿を現し、2本の長い角からもくもくと出る煙は火の粉が混じってキラキラと輝き…。この物体はぐんぐん迫って来た。誰かが「あれは何だ、ダヌル爺や!」と叫ぶ。爺やは厳かな調子で (with deep solemnity) 言う。「全能の神様ですだ (It's de Almighty) ! ひざまずきなせえ (Git down on yo' knees) ! 」(37) ——ダヌルが宗教的幻想にとらわれているところ (=②タイプ) を茶化すように描いている。『ハック・フィン』の中で黒人ジムが皆の前で、魔女を乗せて世界中を飛んだと驚かせる場面を予見させる。さて、ダヌルの演説 (?) であるが——

「おお神よ、おらたちはうんと悪いことをして来まただ。だから、地獄に落ちて当たり前だということぐらい、わかっていますだ。でも、やさしい神様、おらたちゃ、まだ準備ができてねえ。——かわいそうな子供たちに、もう一度、もう一度だけチャ

ンスを下せえ。誰かの命をとりなさるんなら、この爺やの命をとって下され。…この子供たちには責任はねえ。神様、あそこら辺り（自分たちが出てきた町）には、…強情で、下劣な、頑固な大人どもがたくさんいます。この子供たちを責めるなんて、神様のご慈悲らしくねえし、神様の情けらしくねえし、寛容らしくねえ。この子たちの命を助けて下せえ…。この子たちを逃がしてやって、この黒んぼに罰を与えて下せえ。ほら、神様、おらはここにおりますだ！」(38)

――『アンクル・トム』のトム爺やのセリフかと思わせるほどである。Twainが黒人を作品に登場させたのは、今回が初めて（これまでの諸作品には見当たらない）であり、そのセリフがこれなのである。隣家でもあった、ストウとWarnerの影響をここでも感じざるをえない。

しかし、怪物（蒸気船）は火をめらめらと吐きながら、すぐそばまでやって来る。突然の恐ろしい轟音に、ダヌル爺やは腕に子供をひとりずつ抱え、先頭を切って森の中に逃げ込む（ユーモア）。その後、恥ずかしそうに足を止めて、小さな声で言う。「ここにおりますだ！」――この辺りが、『アンクル・トム』のトム爺やとは違う。ダヌル爺やは現実的なのだ。今まで、虚勢をはっていただけなのだ。ダヌルのトム・ソーヤー的本質（②タイプ）が出た。Twainならではの描き方である。（ここで、ダヌルが聖職者ぶって虚勢をはり続ければ、「少女宣教師メイミー・グラント」のような展開〔そして→ブラックユーモア？〕になっていただろうが、共著者Warnerがそれを嫌ったのではないか。）

怪物がなぜか、去ってくれたので、皆は安堵する。爺やは、用心深く偵察に行った（ユーモア）。“神”は、岬を曲がるところだった（ユーモア）。爺やは「お祈りで助かったんじゃ」と言う。クレイ「爺や、お祈りのおかげだと思うの？」爺や「思うかですって？おらには分かりますだ。…神様は、おらたちをにらみつけて、手を伸ばしてつかみかかろうとしなさっただ。誰にも頼まれもしねえで、おらたちを見逃してくれると思いますかい？絶対ねえです！」（後の、思い込みの激しい黒人ジムと合理的なハックの会話を思い起こす。）クレイ「爺や、こわかった？」爺や「とんでもねえです！お祈りしているときは、何にも怖くねえ…」クレイ「じゃ、何で逃げたの？」爺や「そりゃまあ、おらは――人に精霊が乗りうつっているときは、自分が何をやっ

ているか、わからねえで…」。クレイ（①タイプ）の質問に、たじたじとする爺や（②タイプ）が滑稽に描かれている。聖書のことに話が行って、爺やは混がらがってくる。そのうち、怪物がまたやって来る。クレイが「別のやつだ」と叫ぶ。爺やは「いや、同じ神様ですだ！すごい火と煙だ！今度は本気ですだ（Dat mean business）」（ユーモア）。子供たちに寝るように言い、「爺やは森に行って、一生懸命祈りますだ」と言って去る。最後は「爺やは、森の奥に行き過ぎて、神様に声が聞こえたかどうか、不安になった」(39) と、作者が茶化して終わる。爺やは、まさに幻想にとらわれたトム・ソーヤータイプに描かれている。

この調子で、Twainの3タイプの「子供」が次々と作品の中に織り込まれる。③タイプは第53章に出てくる。Warnerの影響を感じさせる「子供」も登場している。更に詳しい分析は、稿を改めて行いたい。

参考文献

Anderson, Frank & Sanderson (ed) : *Mark Twain's Notebooks & Journals, Vol.1 (1855-1873)* (U of California Press, Berkley, Los Angeles, London, 1975)

Andrews, K. R. : *Nook Farm: Mark Twain's Hartford Circle* (Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1950)

Blair, Walter : *Mark Twain and Huck Finn* (U of California Press, Berkeley & Los Angeles, 1960)

Branch & Hirsh : *The Works of Mark Twain, Vol.15, Early Tales and Sketches I (1851-1864)* (University of California Press, Berkley, Los Angeles, London, 1979)

——: *The Works of Mark Twain, Vol.15, Early Tales and Sketches II (1864-1865)* (University of California Press, Berkley, Los Angeles, London, 1981)

DeVoto, Bernard: *Mark Twain's America* (Greenwood Press, Publishers, Westport, Connecticut, 1978)

Fishken, S. Fisher (ed) : *Mark Twain: The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County, and Other Sketches* (Oxford University Press, New York, Oxford, 1996)

LeMaster and Wilson (ed) : *The Mark Twain Encyclopedia* (Garland Publishing Inc., New York and London, 1993)

McKeithan (ed) : *Traveling with the Innocents Abroad* (University of Oklahoma Press, Norman, 1959)

Stone, Albert E., Jr. : *The Innocent Eye* (Archon Books, Yale U Press, 1970)

Twain & Warner : *The Gilded Age—A Tale of Today—* (A Meridian Book, Penguin Books USA Inc., New York, 1994)

Warner, C. D. : *Saunterings* (Houghton, Mifflin and Company, Boston, 1886)

注

1) 詳しくは拙論「Mark Twainの『子供』観の形成 —— C. D. WarnerそしてAldrichと出会うまで——」(創価大学英文学会『英語英文学研究』第46号) 参照。
2) 上記拙論「Mark Twainの『子供』観の形成」および拙論「Mark TwainとC. D. Warnerの『子供』観——「トム・ソーヤー」誕生までの相互影響——」(創価大学英文学会『英語英文学研究』第50号)。
3) この作品については、上記拙論「Mark Twainの『子供』観の形成」の中で触れた。
4) ここに紹介する2作品ともに、上記拙論「Mark TwainとC. D. Warnerの『子供』観」の中で触れた。
5) ここに紹介する2作品は、上記拙論「Mark Twainの『子供』観の形成」の中で触れた。
6) ここに紹介する2作品は、上記拙論「Mark Twainの『子供』観の形成」の中で触れた。
7) ここに紹介する2作品は、拙論「『トム・ソーヤーの冒険』の視点について」(創価大学英文学会『英語英文学研究』第27号) の中で触れた。
8) 拙論「Mark TwainとCharles Dudley Warnerの『ヨーロッパ旅行記』」(創価大学英文学会『英語英文学研究』第44号) および上記拙論「Mark TwainとC. D. Warnerの『子供』観」参照。
9) 上記拙論「Mark TwainとC. D. Warnerの『子供』観」参照。
10) 以下、同作品の引用部分の日本語訳は柿沼孝子訳『金メッキ時代 (上)』(彩流社、2001年刊) を参考にした。